

第52回 青山学院大学英文学会大会 英米文学科創設70周年記念大会

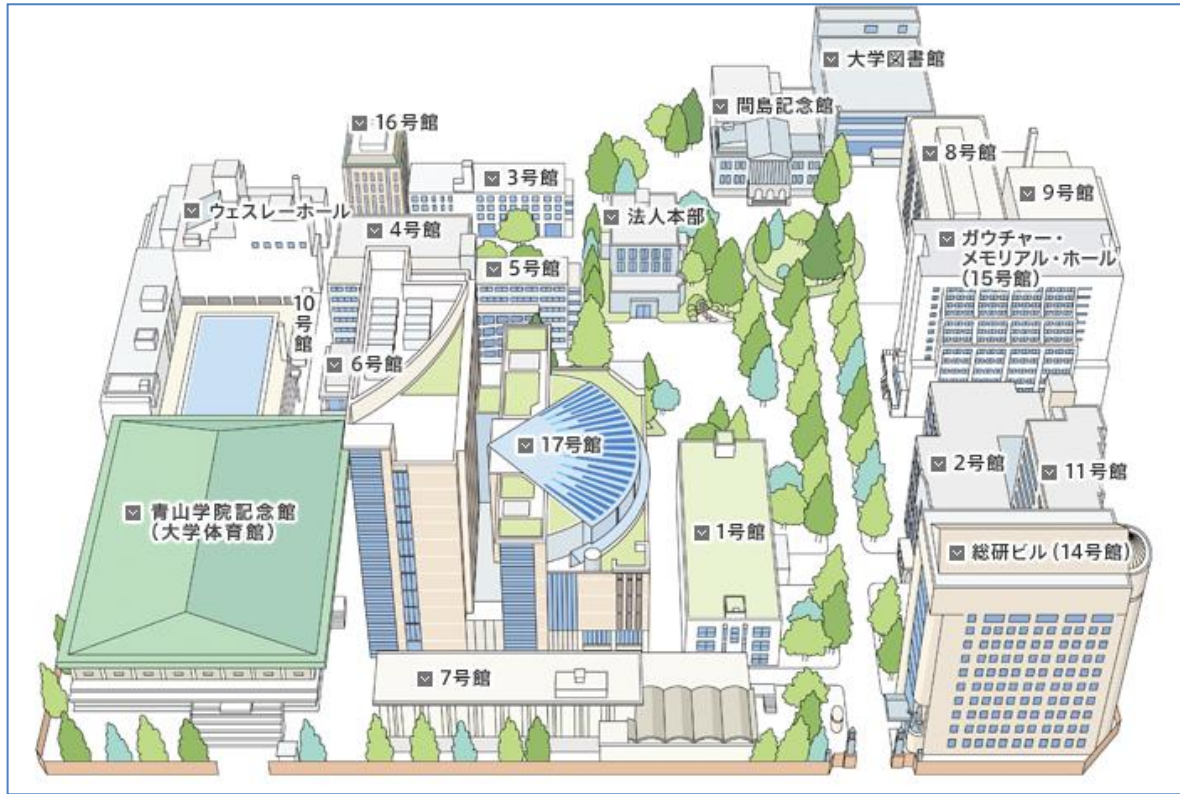
プログラム

日時：2019年11月30日（土）9:00～20:00

会場：青山学院大学 青山キャンパス

青山学院大学英文学会

青山キャンパス構内図



タイムテーブル

時間	プログラム	会場
9:00～9:10	開会式	17号館 5階 17512 教室
9:15～9:55	研究発表 (米文学)	17号館 5階 17507 教室
10:00～10:40	研究発表 (米文学/英語学)	17号館 5階 17507,17508 教室
10:45～11:45	新任者講演 (来馬 哲平 准教授)	17号館 5階 17512 教室

休憩

12:15～12:25	会長挨拶「70周年を迎えて」	17号館 5階 17512 教室
12:30～14:00	退任者講演 (武内 信一 教授)	17号館 5階 17512 教室
14:10～15:40	退任者講演 (吉波 弘 教授)	17号館 5階 17512 教室
15:50～17:30	学科創設 70周年シンポジウム	17号館 5階 17512 教室

IVY ホールへ移動

18:00～20:00	懇親会	IVY ホール ミルトス
-------------	-----	--------------

会場

大会本部	17号館 5階 17510 教室
大会受付	17号館 5階 17512 教室前
学生発表者控室	17号館 5階 17509 教室
講演者控室	17号館 5階 17502 教室

プログラム

開会式 9:00～9:10 17号館 5階 17512教室

開会の辞： アレン玉井 光江 教授（英文学会会長）

学生研究発表 9:15～10:40 17号館 5階 17507, 17508教室

第1室（17507教室） 米文学

9:15～9:55

アドバイザー：Mary A. Knighton 教授

福田 敬子 教授

司会： 伊東 えり子（博士後期課程1年）

発表： 上田 咲樹（博士前期課程1年）

“Ruth Ozeki’s Cross-Cultural Mediators”

10:00～10:40

アドバイザー：Mary A. Knighton 教授

福田 敬子 教授

司会： 伊東 えり子（博士後期課程1年）

発表： 木本 真（博士前期課程2年）

“Unraveling the Mystery of *The Anatomy Lesson* in Donna Tartt’s *The Goldfinch*”

第2室（17508教室） 英語学

10:00～10:40

アドバイザー：中澤 和夫 教授

高橋 将一 准教授

司会： 掛波 健太（博士前期課程1年）

発表： 宮本 恵太（学部4年）

“Perception Verbs in English Locative Inversion”

新任者講演 10:45～11:45 17号館 5階 17512教室

「20世紀アメリカ詩における「翻訳」への欲望」

講師： 来馬 哲平 准教授

司会： 若林 麻希子 教授

会長挨拶 12:15～12:25 17号館 5階 17512教室

「70周年を迎えて」

英文学会会長：アレン玉井 光江 教授

退任者講演

12:30～14:00 17号館 5階 17512教室

「写本研究から学ぶこと—作る立場の視点で写本を見ると何が見える？」

講師： 武内 信一 教授

司会： 中澤 和夫 教授

14:10～15:40 17号館 5階 17512教室

「音声学・音韻論の七不思議」

講師： 吉波 弘 教授

司会： 中澤 和夫 教授

学科創設70周年シンポジウム 15:50～17:30 17号館 5階 17512教室

「英米文学科創設70周年シンポジウム—英米文学科の現状と展望」

パネリスト： 英米文学科 英文学 麻生 えりか 教授
英米文学科 米文学 西本 あづさ 教授
英米文学科 英語教育学 木村 松雄 教授
英米文学科 英語学 中澤 和夫 教授
英米文学科 コミュニケーション Joseph V. Dias 教授
コーディネーター： 英米文学科 主任 アレン玉井 光江 教授
ゲスト・
コメンテーター： 英米文学科同窓会前会長 秋元 實治 名誉教授
英米文学科同窓会会長 佐野 浩子 名誉教授

懇親会 18:00～20:00 IVY ホール ミルトス

20 世紀アメリカ詩における「翻訳」への欲望

10:45～11:45 17 号館 5 階 17512 教室

講師：来馬 哲平（本学文学部准教授）

司会：若林 麻希子（本学文学部教授）

ウォルト・ホイットマン (Walt Whitman, 1819-92) の代表作「私自身のうた」(“Song of Myself”) の語り手は、両手に草を抱えた子供から発せられた「草ってなに？」(“What is the grass?”) という問いにうろたえ、「彼と同じく私も草が何かを知らない」(“I do not know what it is any more than he.”) と自認する。この出会いが契機となって語り手にきざした、生性と死の問題を主な対象とする「翻訳」への欲望が (“I wish I could translate the hints about the dead young men and women.”)、最後まで成就不可能なものであったからこそ、この長編詩は書かれ得たと言えるだろう。

翻案や解釈、パロディ的なもじりや意図的な誤訳など様々な様態を持つ広義の「翻訳」への欲望に駆られ、「翻訳」の失敗を主題化したり、不誠実な「翻訳」を生成的な詩学と捉え直したりすることで生まれた詩は、もちろん「私自身のうた」のみに限らないし、アメリカ詩人の詩に限定されるわけでもない。しかしながら、エズラ・パウンド (Ezra Pound, 1885-1972) の長編詩『詩篇』(The Cantos) に Ming Xie が冠した呼称を借りるなら、20 世紀アメリカ詩には、『詩篇』以外にも「翻訳の叙事詩」(“an epic of translation”) として読まれるべき詩群があり、各々の場からそれを書き継ぐ詩人たちがいたこともまた看過し難い事実である。

本講演では、「翻訳」の不可能性と不可避性とを往還しつつ言葉を紡いだ幾人かのアメリカ詩人を参照しながら、詩人たちが「翻訳」への欲望に目覚める契機に注目し、そこから生まれる「意味」なるものがどのような形を取ったのかを概観してみたい。

写本研究から学ぶこと― 作る立場の視点で写本を見ると何が見える？

12:30～14:00 17号館 5階 17512教室

講師：武内 信一（本学文学部教授）

司会：中澤 和夫（本学文学部教授）

青山学院大学に着任した年（2004年）に行った英文学会の着任者講演では修道院と写本について主として読む立場から論じた。今回の退任者講演では、中世後期の装飾写本をテーマに、作る立場から写本を考えると何が見えるかを論じてみたい。具体的には①装飾写本の材料、製作工程、②ページレイアウトの幾何学性、③メッセージの重要性とボーダー装飾の階層性、④Lesser artist としての装飾職人 (limner) の作業分担と移動の実態、⑤装飾写本にみる芸術性と実用性、⑥Lesser artist としての中世写本装飾職人と William Morris、⑦写本研究から見える現代日本の文系学部問題などを中心に話してみたい。

音声学・音韻論の七不思議

14:10～15:40 17号館 5階 17512教室

講師：吉波 弘（本学文学部教授）

司会：中澤 和夫（本学文学部教授）

青山学院大学文学部の専任教員になってから今年で37年目になります。その間、英米文学科の学生・院生対象の主な担当科目は英語学概論、英語音声学（講義・演習）、英語学演習、言語学特講、音韻論研究・演習などでした。これらの科目を通して、現代言語学理論に基づいた英語および他言語の発音に関する様々な勉強と研究に皆さんと一緒に取り組んできました。本講演では、その過程で学生・院生も私も共に「何で?」、「どうして?」と感じた様々な学術的疑問について、限られた時間ですので、次の7つの話題に絞ってお話したいと思います。

1. 音声学 (phonetics) と音韻論 (phonology) の学問的定義
2. 分節 (segment) と音 (phone) の区別
3. 英語の /t/ と /y/ の発音表記と IPA との相違
4. 音素論 (phonemics) と生成音韻論 (generative phonology) の混同
5. 音節 (syllable) とは何か
6. 日本語の発音単位に関する専門家の勘違い
7. 普遍的音韻単位としての「音節」は存在するのか

これら7つの疑問を足がかりに、私がこれまでに教育・研究を通して気づいた言語学分野の重要な問題を皆さんと共有しながら、それらの答を楽しく探りたいと思います。

英米文学科創設 70 周年記念シンポジウム

「英米文学科の現状と展望」

15:50～17:30 17号館 5階 17512教室

パネリスト：	英米文学科 英文学	麻生 えりか 教授
	英米文学科 米文学	西本 あづさ 教授
	英米文学科 英語教育学	木村 松雄 教授
	英米文学科 英語学	中澤 和夫 教授
	英米文学科 コミュニケーション	Joseph V. Dias 教授
コーディネーター：	英米文学科 主任	アレン玉井 光江 教授
ゲスト・		
コメンテーター：	英米文学科同窓会前会長	秋元 實治 名誉教授
	英米文学科同窓会会長	佐野 弘子 名誉教授

青山学院大学英米文学科は、1949（昭和 24）年に新制大学として開設され、今年 70 年目を迎えました。これを機に学科の現在とこれからを考えたいと思い、学科創設 70 周年を記念するシンポジウムを行います。本シンポジウムにおいて、学科の充実と将来への発展にむけた提言をしていきたいと思ひます。

パネリストには、現在英米文学科でご活躍の各分野の先生方より学科が今後進むべき方向性についてお話いただきます。会場にお集まりの同窓生・在学生の皆様もご発言ください。

1) 麻生 えりか 教授

本学科におけるイギリス文学・文化、グローバル文学・文化分野の教育の特徴について述べる。文学が軽視されがちな現代社会において英米文学科が担う研究・教育活動の意義と展望について語る。

<プロフィール>

専門は現代イギリス小説。主な研究テーマはアウトサイダーと戦争の表象。共著書に『終わらないフェミニズム——「働く」女たちの言葉と欲望』（研究社、2016）、『戦争・文学・表象——試される英語圏の作家たち』（音羽書房鶴見書店、2015）、『もっと知りたい名作の世界⑥ダロウェイ夫人』（ミネルヴァ書房、2006）など。

2) 西本 あづさ 教授

英文科ではなく英米文学科としての本学科の伝統に触れ、現在のアメリカ文学・文化分野の紹介をする。文学を学ぶことの意義と可能性について教室でのエピソードなどを交えつつ述べる。

<プロフィール>

専門はアメリカ文学、とくにアフリカ系アメリカ文学・文化研究。現在の研究テーマは公民権運動後のアフリカ系アメリカ文学・文化の展開と時代の相関関係。共著書に『新たなるトニ・モリスン』（金星堂、2017）、『ターミル・ビギニング』（論創社、2014）、『カリブの嵐』（鷹書房弓プレス、2004）、訳書に『アメリカ先住民の宗教』（青土社、2003）など。

3) 木村 松雄 教授

長年行ってきた英語の測定調査をもとに英米文学科の学生の英語力の移り変わりについて報告し、英語教育からみて本学科が抱える課題とこれからの方向性について述べる。

<プロフィール>

専門は英語教育学（方法論・評価論・政策論）。一貫制英語教育・言語学習方略・CLIL。文部科学省高等教育局大学設置審議委員会委員（外国語）、JACET(大学英語教育学会)理事、NHK「基礎英語1」等3番組の講師、東京都「英語村（Tokyo Global Gateway）」構想事業審査委員、『英語教育政策』（共編著）『青山学院444一貫制英語教育構想』（監修）、『新しい時代の英語科教育法』（編著者）等。

4) 中澤 和夫 教授

英米文学科の特徴を全体的に述べるとともに、それらがどのように機能しているのかを、英語学の立場からみていく。そこから見えてきた学科の課題について述べる。

<プロフィール>

専門は英語学・言語学。研究姿勢としては記述理論言語学。様々な言語現象を正確に記述・分析して、その分析の妥当性を文法理論の観点から考察する。『例解現代英文法事典』、『現代英文辞典』、『コンサイス英文法辞典』（以上項目分担執筆）

5) Joseph V. Dias 教授

The English Department's Integrated English (IE) Program is now in its 26th year. It is an intensive English program for freshmen and sophomores that prepares students to thrive in English-medium courses they will take in their fields of concentration in their junior and senior years. This talk will cover the history of the program and how it came to be the program that it is today.

<プロフィール>

Joseph V. Dias co-coordinates the IE Program in the English Department of Aoyama Gakuin University. He also teaches courses on intercultural communication and food culture, as well as a professional development course for graduate students. His research interests include computer-assisted language learning and autonomy in language learning. He is currently a reviewer for the JALTCALL Journal and the program chair of the Lifelong Language Learning SIG of JALT.

Selected publications

Dias, J. V. (2017). Sort/kind of at the peripheries: Metapragmatic play and complex interactional/ textual effects in scripted dialog. In N. Onodera (Ed.), *Periphery: Where Pragmatic Meaning is Negotiated* (pp. 187-219). Tokyo: Hitsuji Shobo.

Dias, J.V. & Bollinger, D. (2015). Plagiarism: Local solutions for a universal problem. *On Cue Journal*, Winter, pp. 117-134.

Dias, J.V., & Kikuchi, K. (2010). Designing listening tasks: Lessons learned from needs analysis studies. In *Teaching Listening: Voices From the Field* (Nikki Ashcraft and Anh Tran, Eds.). Alexandria, VA: TESOL, pp. 9-31.

第1室 米文学

17号館 5階 17507教室

アドバイザー：Mary A. Knighton 教授

福田 敬子 教授

司会：伊東 えり子 (博士後期課程1年)

発者1：上田 咲樹 (博士前期課程1年)

発者2：木本 真 (博士前期課程2年)

発表1

Ruth Ozeki's Cross-Cultural Mediators

上田 咲樹 (博士前期課程1年)

Ruth Ozeki (1956-) is a novelist, filmmaker, and Zen Buddhist nun who was born to a Japanese mother and American father. One of her most successful works, *My Year of Meats* (1998), was based on her cross-cultural experiences of working for a Japanese TV company as a documentarian, her struggles as a biracial woman, and the idea of meats inspired, in part, by Buddhism. One might also say that Ozeki sympathizes with her biracial woman protagonist, Jane Takagi-Little, who is neither here nor there because of a biracial and cultural identity with which she has not come to terms. According to an interview in an appendix of the book, "A Conversation with Ruth Ozeki," she identifies with Jane, saying "Jane is my extroverted self." Ozeki's metafictional novel represents the role of media as something that maintains a balance between fiction and reality, and even negotiates stereotypes exchanged between Japan and the United States.

As Marshall McLuhan (1911-1980) famously said, "Media is the Message." Ozeki connects meats to an idea of media, saying instead, "Meat is the Message." In the story, Jane plays a vital role as a "mediator" between cultures, languages, races, and genders during the course of shooting a documentary series, *My American Wife!* sponsored by a joint U.S.-Japan transnational meats export company. In the show, American families introduce U.S. meat dishes for Japanese families. Jane strives to bring authenticity to the show not only by focusing on diverse families that are considered minorities but also by exposing the real conditions of the meat industry, even if people do not want to know. As a mediator, Ozeki conveys a message that highlights similarities between media and meat, and between meat and our bodies throughout the book.

Unraveling the Mystery of *The Anatomy Lesson* in Donna Tartt's *The Goldfinch*

木本 真 (博士前期課程 2 年)

Donna Tartt's Pulitzer Prize winning novel, *The Goldfinch* (2013), lends its name to a famous Dutch Golden Age painting of the same title by a painter named Carel Fabritius (1622-1654). At the center of the canvas is a small tethered goldfinch clenching a semicircle perch protruding from a white-plastered wall, looking rather resigned and directly staring at the viewer. The painting is central to the novel's plot. Theo, the protagonist of the novel, takes the painting from The Metropolitan Museum of Art in the confusion following a terrorist attack at the museum. He acquires the painting but loses his mother in the bombing, thereby creating a strong association between the painting and his mother. The painting is a source of reassurance and security for Theo because he feels his mother's presence in it. Fabritius' *The Goldfinch* is constantly in the spotlight, as it is not only the title of the book but integral to the novel; the narrative revolves around it.

However, there is another painting that appears in the novel that was produced during the same era as *The Goldfinch*. Painted by Rembrandt van Rijn (1606-1669), *The Anatomy Lesson of Dr. Nicolaes Tulp* (1632), better known as *The Anatomy Lesson*, depicts a public anatomy lesson that was actually conducted in the year the painting was made. In the novel, Theo's mother explains the painting to him, emphasizing how Rembrandt deliberately painted the cadaver's hand out of proportion so the viewer would immediately sense something "wrong." Even after Theo's mother's death, the "wrongness" she explained to him gets echoed by Theo when he describes his circumstances. The "wrongness" in the painting gets psychologically mapped onto his situation; after losing his mother, his life is characterized by "wrongness," just like the painting. By focusing on this key word and comparing particular scenes from the novel and the composition of *The Anatomy Lesson*, this presentation will show how *The Anatomy Lesson* is far from secondary in significance to *The Goldfinch*.

第2室 英語学

17号館 5階 17508 教室

アドバイザー：中澤 和夫 教授

高橋 将一 准教授

司会：掛波 健太 (博士前期課程1年)

発表：宮本 恵太 (学部4年)

発表1

Perception Verbs in English Locative Inversion

宮本 恵太 (学部4年)

場所・方向の副詞句の倒置 (locative inversion / stylistic inversion) とは、場所や方向を示す副詞句が文頭に配置され、主語と動詞の順序が逆転する現象である。たとえば、*Into the room came John.* という文では、内部方向を表す副詞句 *into the room* が前置されたことにより、通常の SV 語順 (*John came*) が VS に反転している。この構文は表面的には屈折変化した動詞と意味上の主語の配置が直接入れ替わっただけのように見えるが、実際にはより複雑な派生を経て生成された構文であることが種々のデータの考察から示されている。

同構文の代表的な先行研究に Culicover and Levine (2001) がある。彼らによれば stylistic inversion には light inversion (LI) と heavy inversion (HI) の2種類が存在する。両者とも非対格動詞 (unaccusative) との共起が可能であり、さらに後者は前者では不可能な非能格動詞 (unergative) との共起も許すという特徴を持つ。一方、これらの構文を動詞の補文に埋め込んだ場合、たとえば HI が知覚動詞 (perception verbs) と共起した場合に生じる問題は未解決である。Culicover and Levine は **We saw into the room an angry horde of Tolstoy scholars run.* が容認されない理由としてフランス語の例外的格標示 (French exceptional case marking; ECM) との関連を示唆しているが、HI intonation と呼ばれる特殊な読み方で発話された *We actually saw into this room RUN a ravenous horde of angry Tolstoy scholars.* が容認可能な理由を明示していない。

本発表では、perception verb complement に生じる locative inversion (LocI in PVC) の分析を通して知覚動詞の補文と HI の関係性を追究する予定である。知覚動詞の構造として主に Felser (1998) を参照しつつ、関連する先行研究の整理を基に、LocI in PVC における各要素の階層上の位置関係を考察したい。その際、Culicover and Levine (2001) による HI の分析の問題点を指摘し、より妥当性の高い代案を探ることにより、postverbal subject NP の移動先の候補や V・PP など他の要素との相互作用に言及する。

もしこの提案が正しい方向を向いているとすれば、上記の先行研究で不十分だった分析を新たな視座

から捉え直し、HIの派生と知覚動詞補文との関係性についてもさらなる知見を与えることができるだろうと発表者は信じている。

Diversity Matters: Perspectives Across the Disciplines on Affirmative Action.

Produced and Directed by Mary A. Knighton and The Diversity Video Project Group (2000). 56 min.

日時：11月28日（木） 15:00～17:00（ビデオ上映と討論会は英語で行なう）

会場：17号館6階、本多記念国際会議場（入場無料、参観自由）

Moderators: Mary A. Knighton（本学英米文学科教授）

大川 道代（本学英米文学科准教授）

At Aoyama Gakuin University, this documentary film will be screened for faculty and students interested in learning more about concepts of diversity, multiculturalism, and affirmative action policies in higher education in the U.S. After the film screening, faculty and students, together with the filmmaker, will gather together to discuss frankly the ideas in the film and how the political and social landscape has changed since the film was first made. In discussion, students will be asked to share their own viewpoints about diversity in their home countries and cultures in relation to the ideals, concepts, and disappointments expressed by those who appear in the film.



Jim Norman, "Americans' Support for Affirmative Action Programs Rises," (27 Feb 2019)
news.gallup.com

In this documentary film, professors and students at the University of California, Berkeley frankly discuss their views on diversity in the broader society as well as in college student populations, debate definitions of diversity, and reflect on the value of multiculturalism in higher education and the need for affirmative action programs. It includes a historical look at resistance to affirmative action programs in the University of California college system. This film is organized into three main parts in order to examine the abstract idea of diversity and how the concrete policy of affirmative action works and does not work to realize the potential of the ideal: It takes up past history, the present, and the future of diversity.

青山パフォーマンス・フェスティバル

学部生による英語発表会

12月14日（土）

公開リハーサル 8:30～10:30

17309, 17410, 17511 教室

英語演劇発表会 10:30～12:30

17309 教室

本学学部生が授業の一環として教室で発表した文学作品の群読（readers theatre）、およびオリジナル英語劇を発表します。指導なさっている先生方による講評もあります。スピーチ・コンテストの様な順位付けはしません。サークル活動など、学生の自主的な活動とも異なります。ここでの発表は授業時に教員の指導を受けたものに限定されます。よって、その理論背景を学ぶ好機になります。指導教員による授業目標や作品の解説を聞きながら、英語による朗読発表やプレゼンテーションを批評する視点を養います。

本学学部生による多くの英語発表を見学し、アドバイザーや発表者と意見交換することで問題意識を高め、更なる英語力の向上を目指しましょう。司会進行と発表は全て英語で行ないます。

どなたでも自由に参観できますので、積極的に参加して下さい。

発表する本学学生（予定）：

IE Seminar in Performance 履修生

Speech Communication II 履修生

IE Seminar in Theater 履修生

アドバイザー：Hamilton Armstrong 氏（本学文学部 非常勤講師）

Paul Howl 氏（本学文学部 非常勤講師）

Christopher Parham 氏（本学文学部、非常勤講師）

司会・アドバイザー：Andrew Reimann 氏（本学文学部 准教授）

大川 道代 氏（本学文学部 准教授）